
カフェ「ハーモニー」・・・前髪を掴め！番外

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カフェ「ハーモニー」・・・前髪を掴め！番外

【Nコード】

N2944P

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

「前髪を掴め！」の後のお話です。

主人公は多分バラバラ。時系列もバラバラで、その時々短い話になります。

本日、オープン！（前書き）

「前髪を掴め！」番外です。
不定期にアップしたいと思います。

本日、オープン！

カフェ「ハーモニー」のオープンは、桜の前触れみたいな日だ。
一子さんご招待の『いつちゃんち』の常連さんたちには、お祝いの言葉と出席のお返事をいただいたし、思い切って公園側の壁を外して半分ガラス張りにしたのは、大成功だった。公園の花が見える。お祝いの花も、知り合いからいくつもいただいた。

一子さんから店を借り受けると決定してから、ものすごいスピードで毎日が進んだ。

各種申請と手続きの他にも片付けなくてはならないことがあれこれあつて、家に帰ると死んだように眠る日々。

その間がちがちに固まった誠司君が私の家に挨拶に来たり（スーッではじめて見た！）私が誠司君の家に呼ばれたりで、そっちの方も体裁だけ繕ってどうにかした。

私の両親は実は職業にちよつと不満だったみたいだけど、ひとり水商売（すごい言い方！）するより、結婚して家を出てくれた方がマシだと思つてたみたいで、すぐに折れた。
だから、入籍してないのはナイショだ。

誠司君は私の見かけにずいぶん騙されているし、私も敢えて否定はしないので、私たちの間は多分安泰だ。

私は繊細なロマンチストじゃなくて、頑固なリアリストだよ。見る目ないね、誠司君。

でもね、去年は本当に挫折そうだったの。誠司君の励ましは私の一筋の光だった。

「結婚」にずいぶんグラグラ来たのも確かだけど、失敗した時に店と誠司君を一度に失いそうで怖かった。

人間の感情なんて、そんなにアテになるものじゃない。

店の改修がはじまって、ここに住み始めた時に「ただいま」と帰って来る誠司君を迎えるのがやけに嬉しくて、照れ隠しみたいに店を出す予定のお料理の試食を片っ端からさせた。

男の子にはあまりにポリウームのない食事、ごめんね。

家事分担も、食事と洗濯以外の殆ど全部を押しつけて、ごめん。

多分この先に子供ができれば、誠司君に保育園の送り迎えもさせるけど。

帰宅した時に私が大工仕事してたりペンキを塗ってたりすると、誠司君も食事後回して手伝ってくれた。

お金をかけたくなかったからカッポードもプランターカバーもみんな手作りで、それはちよつと自慢。

今日来てくれる予定のお客さんたちが何人が覗きに来て、いい店になりそうだって言ってくれたもの。

一子さんには、とても感謝しなくてはならない。

高校生の女の子たちが「こうした方が可愛い」なんてアドバイスをくれたりもした。

一子さんの最後のイベントの「バレンタインデーのチョコレート教室」に来ていた子たち。

恒例の行事だったっていう。私も引き継ぐから、よろしくね。

昨晚、開店前の大掃除（クリーニングサービスはいらないと誠司君がやった）を済ませたあと、誠司君が後ろから肩を包んでくれた。

「いよいよだね、睦美ちゃんならきつとうまくいく」

いつの間にそんな言い回しをするようになったんだろう。

うん、と私は答える。大丈夫、誠司君が捕まえてくれたチャンスの神様を、逃がしたりはしないから。

開店のお祝いの料理の仕込みは済んだ。

誠司君が私道を掃いて綺麗にしてる。もうじき、一子さんが来てくれる。

誠司君の「兄代わり」の徹さんのご家族も来てくれる筈。

小さなハーブガーデンを作って、セイジの株を植えた。

「ハーモニー」なんて店名は古臭いと誠司君は笑ったけど、ちゃんという意味はあるんだよ。

絶対に、口が裂けても言わないけどね。

セイジの花言葉は「家庭の調和」なの。そう、harmony of home、わかる？ 誠司君。

開店一時間前。花をテーブルに置いて、カーテンを開けよう。

白いシャツと濃紺のエプロンは、私の戦闘服になる。

さあ、戦いは、これから。

f i n .

本日、オープン！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

ぼちぼちと続きますので、おつきあいくださると嬉しいです。

ホットチョココレート

ふられた。

去年のバレンタインデイに「いつちゃんち」のおばあちゃんのチョココレート教室で一生涯懸命に作ったチョコを持って、バスケット部のあいつに決死の覚悟で告白した。

「今カノジョいないし、つきあってみちやおうか？」

そんな軽いノリのOKでも、私にははじめてできた彼氏だった。

毎日部活が終わるのを待って一緒に帰って、毎日メールして、手を繋いで映画を見た。

夏休みには一緒に海に行って、夕暮れの浜辺でキス（ファーストキスだった）までしたのに。

「おまえ、ウザい」

ひどい一言で、あっさりメールに着信拒否をかけられた。

部活の帰りを待っていると、裏口から出ていくようになった。

あたしと話してくれないから、友達に頼んで理由を聞きに行ってもらった。

そうしたら、その日のうちにあいつからメールが入った。

毎日待ってられたり、どこがイヤだったって説明させられたり、超迷惑。

俺しか楽しみがないようなヤツって重たくてウザい。もう、俺にはかかわらないで。

だっただっただって！

つきあってたら、毎日一緒に帰りたいじゃない。休みの日も顔を見たいじゃない。

メールの最中に寝ちゃってたら寂しいじゃない。何考えてるのか、

あたしのこと好きなのか、ちゃんと知りたいじゃない。

あいつの都合優先で、友達との約束は何回かキャンセルしたけど、それだってあいつが喜ぶと思って！

・・・それが重いつてことは、あたしのこと好きじゃなかったの？

あいつと手を繋いで帰った公園の抜け道を、うつむきながら帰った。「いっちゃんち」は綺麗になっちゃって、ちょっと可愛いお店になってる。

チヨコレート教室で一緒にいた友達は、その後も通って来てるけど、あたしは入ったことがない。

帰りは毎日あいつを待って遅くなっていたから。

ドアを押すと、チリリリンと可愛い鈴の音がした。

どこか違う国のリビングダイニングみたいな、不思議に落ち着くインテリアの中で、若い女の人が笑う。

「あら。一子さんのお客さんだった人ね」

会ったこと、あったっけ。

「最後のチヨコレート教室に、私もいたのよ。勉強させてもらったの」

そう言えば、大人も何人かいた気がする。

あたしはあの時、あいつに渡す物を作るので頭がいっぱいだった。

好きだったのに。一日中ベタベタしてたいくらい好きだったのに。

なのに、あたしのがウザいって。

「チヨコレートなんて、キライー！」

しゃがみこんだあたしを、他のお客さんが見てる。

八つ当たりの営業妨害だ、あたし。

だって、苦しい。悲しい。なんでこんな思いをしなくちゃならないの。好きだったのに。

女の人に肘をつかまれて、カウンターの前に座らされた。

ひとしきり泣いて、やっちゃった気分では顔をあげると、目の前に湯気の出るカップが差し出された。

「これ、まだお店に出してないの。試作品だから飲んでみて」「甘い香りが立つ。」

「・・・おいしい」

「でしょ？キライじゃないでしょ？」

悪戯っぽく笑った女の人は、それきり何も言わなかった。

迷惑をかけた分だけお勘定をお願いしたら、商品じゃないからと受け取らなかった。

ごめんなさいって何回も頭を下げると、そういうこともあるのよって笑うだけ。

「冬になったら、メニューに載せるわ。その時にはちゃんと支払ってもらおうから」

その後、「ハーモニー」には友達と何回も行ってる。

睦美さんはにこにこ話を聞いているだけで、何も言わない。

一度だけ、睦美さんの話を聞いたことがある。

「誠司君は私のやろうとしてることを止めようとしてたり、私の時間を独占しようとしてたりしたことはないよ」

あいつがあたしを「ウザい」って言ったのは、そういうことだったのかな、と思う。

f i n .

番犬

土日のカフェ「ハーモニー」には、鋼鉄の番犬がいる。庭の手入れをしていることもあれば、トレーを持つていることもある。

番犬の仕事ぶりは常連たちの秘かな楽しみなのだが、犬自体はそれに気がついていない。

「どさくさに紛れて睦美ちゃんの手を握るなっ！」
ちいさなおばあちゃんが一人でやっていた喫茶店が改装して、今風の店になった時から睦美さんはアイドルだ。
白いシャツはいつも清潔で、優しい声とほんわかした笑顔に癒されるために、カウンターに座りたがる人は多い。

番犬は気が気じゃない。

大切なご主人さまを守るために、そこにいるのだ。

手を握って見せるとか、営業後の食事に誘うとか、誰も本気なわけじゃない。

番犬が吠えるのを楽しみに聞いているだけだ。

ここは、先月までつきあっていた女の子と何回か来たことがある。

睦美さんはここにこして僕たちを見てただけだったけど、別れた後に一人で行った時に、紅茶に小さなお菓子が添えられていた。

その日は雨で、公園の葉っぱはびしょびしょで、客は僕一人だった。

「今日はトクベツ。ナイショよ？」

何にも言わなくても、わかっているんだ。僕が彼女に思いつきりフラれて、落ち込んでること。

黙ってカウンターの中で作業をしている睦美さんと、黙って外を眺める僕。

とても穏やかで安心できる場所にいるようで、僕はずっと雨を見て

いた。

僕はカウンターには滅多に座らない。

睦美さんが常連のお客さんと世間話をしたり、僕と同じくらいの女の子の相談に乗ってやつたりしているのを聞いている。

一人で喫茶店に通うのはおかしかなと、友達を何人が誘ったりもした。

カフェにしては食べるものに力を入れているので、男を誘っても苦情は来ない。

いつも睦美さんはここに迎えに来てくれるだけだけど。

土曜日の五時過ぎ、散歩帰りの親子連れが何人か帰り、番犬が洗い物をしてる。

番犬さえいなければ、今の時間は睦美さんと僕だけになるのに。

「誠司君、せっかく休みなんだから、好きなこととしていいんだよ？お客さんも薄くなってきたし」

そっだよ、番犬。ご主人さまもそうおっしゃってる。

「だめ。そいつがいるから」

番犬は失礼にも僕を指差した。

「他の客ならともかく、そいつがいる限りはここにいる」

「誠司君っ！お客様にそいつって！」

睦美さんが番犬の指を握って喰ってかかるのと、番犬が僕に向かって声を発したのは、ほぼ同時。

吠えたんじゃないくて、静かな声だったけど。

「睦美ちゃんに気があったって、ダメ。俺のだもん。客なら歓迎だけど、ガキの失恋になんか立ち会いたくねえし」

言葉は雑だけど、優しい口調だった。

「他の客にからかわれるのは、両方わかってやってることだから。でも、あんたは違うでしょ。本気になる前にやめとけ」

睦美さんは戸惑った顔で、僕と番犬を見較べていた。

「そんな訳ないじゃない！高校生の男の子よ！失礼だわ！」
弾かれたように睦美さんが大声を出す。

「睦美ちゃん、高校生でも男は男だよ。な？」

番犬は僕に向かってニヤつと笑ってみせた。
敵わないな、と思った。番犬はご主人さまの異変をちゃんと察知するのだ。

先払い方式なので、立ち上がるだけでいい。

カウンターにまわって、睦美さんに「ご馳走様でした」と挨拶する。

「誠司君が失礼して、ごめんなさいね。また来て」

「来ます。それに、失礼じゃありませんでした」

ドアを開けて公園まわりで帰る途中、植え込みの間から「ハーモニー」を振り返った。

暗くなった公園から、まだ明るい店の中が見える。

睦美さんが笑顔で番犬に何か話しかけてる。

僕に向ける顔じゃなくて、子供みたいな可愛い顔で。

あ、他人に見えるところでキスなんかするんじゃない！番犬のクセにっ！

ふと顔をあげた番犬が、僕に向かって親指をあげて見せた。

明るい場所からここなんて、見えるわけなのに。

ああ、敵わないな。行動まで読まれちゃってる僕の負けだ。

番犬は番犬であることをちゃんと自覚してる。

睦美さんの笑顔は、守られてるってわかっているから。

僕も、いつか誰かを守るようになる時が来るのかな。

勢いをつけて蹴りつけたケヤキの木から、残った葉が僕に降りかか

f
i
n
.

つ
て
き
た。

幸せ？

別れた女が「カフェ」を出したと聞いて、ちょっと行ってみる気になったのは、見届けたかったからだ。

俺と結婚するよりも自分がやりたいことを優先すると言った女が、どれだけのことをしているのか確認したかった。

料理が上手なのは知っている。見かけほど甘い性格じゃないことも知っている。

だけど「カフェ」なんて商売は、やる気だけで上手く行くわけない。オンナノコの夢物語だけで、生活の根本を揺るがせたくない。

「俺と結婚するんなら、カフェを開くなんてバカな考えは捨てるよ。そう言ったら、あいつは泣きながら食ってかかってきたんだ。」

「あなたが結婚したいのは『私そのもの』なの？それとも『私であることを放棄したもの』なの？」

ただの夢物語にご大層な・・・そう思った。

お互いの両親を紹介しあつて婚約指輪の話も出ていたのに、まさかそこで終わるとは正直思っていなかった。

「おまえが考え直すまで、結婚はお預けにしよう」

「考えなおしたりしないから、ここでお終いにする」

一晩話し合つて泣き腫らした目でも、あいつは一步も引かなかった。俺も引く気はなかった。間違っているのは、あいつの方だ。

知り合いから貰った地図を頼りに、住宅地から木の多い公園に抜ける道の一番隅。

白い看板に「CAFE HARMONY」の文字がなければ、見落してしまいそうな地味な場所。

こんなところに客なんか入るわけがない。あのまま俺と結婚すれば、

しなくても良かった苦労をしてるわけだ。
結婚したって聞いたけど、相手はよっぽど将来のことなんか考えてない奴なんだろう。

ドアを開けたら、記憶にある声が「いらっしやいませ」と俺を迎えた。

やあ、と軽く手をあげる。

客はテーブルにふたり、カウンターには俺だけ。
これじゃ採算なんて取れないだろう。

「久しぶり。知らせなかったのに来てくれたのね」

カウンターに座った俺に水を出しながら、あいつは微笑む。
綺麗になった。それだけは認める。すごく綺麗になった。

「どう？その後」

「私？多分今まで生きてきた中で、一番充実してる。自分の可能性がもっと広がるんだって実感できる。あなたは？」

「変わらないよ。平穩で普通。それが一番幸せだから」

「私も平穩で普通よ？仕事して、生活して。多分、あなたの普通と私の普通は違うものなのね」

可愛い鈴の音と共に高校生が何人か、店に入ってきた。

「睦美ちゃん、ねえ聞いてー！」

「こらっ！他のお客さんもいるのよ。今行くから待ってなさい」
あいつは俺に向き直った。

「忙しい時間帯になるわ。お構いできないけど、ごゆっくり」

しばらく、黙ってコーヒーを少しずつ飲んでた。

客は入れ替わり、本を讀んでいたりとお喋りに興じていたりそれぞれだが、共通点はある。

全員がリラックスした顔をしているということだ。

それはあいつが 睦美が 作り出している空気そのもの、なのだ。あいつが楽しんで仕事をし、この空間を慈んでいるのだと空気に伝えているのだ。

俺との生活だけに閉じ込めたら、あいつはこれを作れただろうか。

「ご馳走様。旨いコーヒーだった」

「ありがとうございます。また来てね」

良い笑顔は、何年か前と変わらない。優しい声も変わっていない。

「睦美、今、幸せ？」

「うん」

力強い答えだ。

「手応えのある仕事を持つて、それを支えてくれるパートナーもいて、これ以上のことってない」

ああ、本当に綺麗になった。

店を出て、看板の下についているポストの名前を見た。

「小野誠司・福島睦美」

まったく同じ大きさで、同じ書体で並んでいる。

もしも、と俺は考える。

もしもあの頃俺が、会社員を辞めて何か新しい事業をするなんて言ったら、あいつはどう反応したんだろう。

会社員を辞めるなら結婚しない、なんて言っただろうか？

私道の角を曲がる前に、もう一度店を振り返った。

気がついたあいつが手を振る。

俺ね、来年結婚するんだ。おまえと違って、俺のこと大事にしてくれる子と。

言いそびれた言葉が口の中で苦い。

あいつが俺を大事にしてくれなかったんじゃないかって、俺があいつのことを大事にしてなかったな。

今度は間違えないでおこう。

幸せそうで、良かった。

駅に向かう道の途中に、空を仰いで溜息をついた。

f i n .

メリー・クリスマス

クリスマス・イブの前日は天皇陛下の誕生日で、睦美ちゃんは朝からでんてこ舞いだっただ。

俺だけの手伝いじゃ全然足りなくて、睦美ちゃんの友達を応援に頼む。

ドアにリースを飾って、テーブルの花が小さなキャンドルスタンドになって、生木のツリーを設えただけのクリスマス仕様。

豪華なクリスマス・ディナーじゃなくて小さな店のささやかなランチでも、家族連れは楽しそうだ。

「チキンのトマトソース・温野菜のサラダ・オニオングラタンスープ・玄米のごはん・デザートはお楽しみ」

メニューは一種類、子供用にはハーフのプレート。

家族構成を見ながら、睦美ちゃんは盛り付けを微妙に変えていく。カウンターの中から窺う「ビジネス用の顔」は、結構シビアだ。

「鉄のよろい」だけじゃなくて「はがねのつるぎ」も装備してるな、と思う。

夜の七時に閉店した時には、睦美ちゃんはグダグダに疲れていた。

「店の掃除しとくから、先に風呂入っちゃえば？」

「ごめん、そうさせて下さい。足が浮腫んで死にそう」

死なれちゃ困るので、居住部に睦美ちゃんを押し込む。

やらなくちゃならないことがあるし。

掃除を済ませて、自分も居住部に戻る。

夕食は昨日の続きのカレー、店とは違っていたって地味。

仕方ないよな、睦美ちゃんの仕事はそなんだし、はじめからわかってたことだし。

炬燵で向かい合ってカレーを食べるクリスマスのイブイブ。俺も別にクリスマスチャンじゃねえし。

「明日は誰か手伝い頼んでる？」

「うん、大丈夫。今日ほどお客さん多くないと思うし」

「ごめんね」

睦美ちゃんは唐突にそう言った。

「一緒に住んではじめてのクリスマスくらい、ふたりでちょっと良い夜を過ごせれば良かったね」

去年は俺の仕事が立て込んだのに、睦美ちゃんは嫌な顔をしながら。

皿をシンクまで運んで、睦美ちゃんの座っている所に一緒に入る。

二人用の炬燵、小さい。

肩に腕をまわしたら、睦美ちゃんは柔らかく寄りかかってきた。

大丈夫、これも充分良い夜だから、なんて照れくさくて言えないけど。

朝起きて、出勤途中にコートのポケットに手を入れたら、知らない感触があった。

引っ張り出すと新しい手袋、中に小さなカード付。

うーん、同じようなことを考えるもんだ。

あと一時間もすれば、店で仕込みをはじめた睦美ちゃんは、マイカツプのなかに包みを見つける筈。

食べ物を扱う睦美ちゃんは指輪はつけられないから、ピアス。

ちゃんと驚いてくれよ。

会社に着いたら、携帯の着信音が鳴った。

ありがとう。だいすき。睦美

もちろん、すぐに返信した。

文面については、珍しく秘しておく。俺にも照れや恥じらいってものは残ってたんだ。

f i n .

冬の一日

アラジンのストープに乗せられた薬缶から、湯気が立つ。

寒い時期に訪れる客は、一様にその前で足を温めながらオーダーを告げる。

「ミルクティーと、何か」

睦美ちゃんが笑いながらメニューを差し出すのを、カウンターに座って見ていた。

本当は時々、一緒に映画に行ったり食事に出たりしたいと思う。

たまに取る有休や振り休は、「ハーマニー」の定休日に合わせるんだけれど、二人でパジャマのままゴロゴロして、DVD見ながらピザ齧って、なんていう休日も欲しいわけさ。

でも、それを言ったら生真面目な睦美ちゃんは悩む。

睦美ちゃんが頑張ってる以上、俺はそれを応援するしかない。

俺と一緒にいたかったのは、そういう人だから。

土曜日の午後早い時間、毎週のように訪れる年配の夫婦は、奥さんが車椅子だ。

「まったく歩けないわけでもないんだけどね、ここまではちょっと難しくって」

サンドウィッチを一皿分け合って、ゆっくり紅茶を飲んで、公園経由で帰るらしい。

年季が入ってあちこち角が取れて、「夫婦」の部分だけが残ってる、そんな感じ。

いいね、ああいうの。

窓際に座って公園を眺める夫婦のオーダーを取る。

「今日は、ケーキをもらおうかしら。この人の誕生日だから」

奥さんが晴れやかに笑う。

「おめでとうございます。おいかつなんですか？」

「七十七。喜寿だよ、もう」

「見えませんね。ふたりともお若いし、仲が良くて羨ましいです」

「子供がいらないからね。そっちの苦労がなかったから」

旦那さんがさらりと言い、奥さんが頷く。

「私たちはお互いしか頼るものがないの。だから、仲違いなんかできないのよ」

「高度成長期の人たちだからね、奥さんは寂しかったって言ったわ。子供もいなくて、旦那さんは忙しくて」

カップを棚に納めながら、睦美ちゃんが言う。

「若い時に楽しめなかった結婚生活を、今やり直してるんだって言うってた」

睦美ちゃんがカウンター越しに見ているのは、公園の冬木立だ。

春になれば、丈の低いレンギョウやユキヤナギが咲く道は、今は枯れたように見える細い枝。

「これで早死にしてたら奥さんに申し訳なくて、あの世で頭が上がらない、なんて言うってた。優しい旦那さんだな。いいね、ああいう年配の夫婦」

俺も、今日旦那さんに聞いた科白をそのまま伝える。

お客の噂話でも、共通の話題を持てるのが嬉しい。

「私も今死んだら、あの世で誠司君に頭が上がらないな。私だけが自分の好きなことしてて」

睦美ちゃんは上目遣いに笑いながら、そんなことを言う。

不満を言い当てられたみたいで、ぎくつとする。

口に出さなくても、俺が内心で望んでいる「休日俺だけの睦美ちゃん」ができないことを、一番気に病んでいるのは睦美ちゃん本人だ。

外に風が出てきたみたいだ。こんなに寒くては、公園を散歩する人はいない。

ただと営業中の札が出ている限り、店の中にいるのは「ハーモニーの睦美さん」だ。

「桜の季節になる前に、休みを合わせて温泉にでも行くこうか？」

「週末、休めるの？」

「私がオーナーだもん。陽気が良くなってお客さんが多くなるとちよつと無理だけど」

夕方の客の引いた店の中、早仕舞いの準備をして睦美ちゃんはカーテンを引く。

ガラス越しの風の音が聞こえる。

「せつかく一緒に暮らしてて、あの人との生活は寂しいだけだった、なんて思われたら困るもの、ね」

一緒にいたくて、あれこれ画策したのは俺だ。そうになると今度は別の物が欲しくなる。

人間の欲って言うのは、どうしようもない。

「看板、もう仕舞うから」

外に出て振り返った冬木立の中に、強い風が吹く。

あんな日も、いつか来るのかも知れない。

火を落とした店の中で待つ、睦美ちゃんを見る。

今死んだら、あの世で頭が上がらないのはやっぱり俺だ。

大事にしてもらってるのに、店の掃除をするくらいしかできないんだから。

せめて睦美ちゃんが強い風の中に立った時には、根元の風除けくらいにはなるう。

そうすれば春に花が咲いた時に、一番にその花を見ることができただろ。

「温泉、どこに行こうか」

睦美ちゃんに声をかけて、店の中に戻る。

俺に気を遣って休みを取ってくれるんなら、それを楽しいものにするのは俺の役割だから。

客が薄い時期に、一日だけ睦美ちゃんを借ります。

店に引つ込めた『cafe Harmony』OPENの看板に、頭を下げてみた。

睦美ちゃんから俺がもらっている物ほど、俺から睦美ちゃんに渡せる物があるのかどうか、未だに自信がない。

年季が入って角が取れる頃、俺たちは「いいね、ああいうの」って見てもらえる夫婦になってるだろうか？

これからまだまだ長いことかけて、ふたりで作っていく物が満足のいくものでありますように。

店の灯を落として、居住区に戻る。

まだ一年にも満たない生活、これからも続く。

f i n .

ホワイト・バレンタイン

本当は今日、一緒に座っている筈だった。

先週につまんないケンカをしなければ、向かい側には彼女が座ってて、チョコにリボンをかけて渡してくれる予定だった。

売り言葉に買い言葉だったけど、それが彼女のプライドに障る言葉で、彼女は泣きながら走って帰った。

僕も家に戻った時にはまだ相当に腹を立てていて、仲直りのメールどころか携帯電話に名前を表示させることすらイヤだった。

けれど翌朝「おはようメール」が来なかった時、もしかしたら取り返しのつかないことをしたのかも知れないと感じた。

僕から彼女に送った「おはようメール」の返信は来なかった。

放っておけばそのうち機嫌も直るだろう、こっちから歩み寄るのはなんとなく面白くない、そう思って一週間。

彼女からは何も連絡がないままに、バレンタインデイが来た。

もう、僕とは終わったつもりなんだろうか。

昨日の部活帰りに、彼女が同じ部の男と楽しげに話しながら歩いているのを見た。

肩越しに僕を見て、見えないフリをした。

僕は自分が透明人間になったように思った。

あの時、言い返さずに冷静に彼女の言葉を受け止めれば、透明人間にならずに済んだんだろうか？

帰宅してすぐに俺びのメールを入れれば。

泣きながら走り出した彼女の腕を掴めば。

ifの場合ばかり考えて、結局僕はこうして今も動き出さずにいる。そして、ひとりでホットチョコレートなんか飲みながら、もしかしたらなんて考えているのだ。

「雪が降ってきたわね」

睦美さんがカウンターの中で言う。

楽しそうなカップルたちに背中を向けたカウンターに座る僕に、睦美さんはいつものふんわりした笑みを浮かべる。

「ねえ、ちょっと頼まれてくれないかな。看板の横に大きな花があるの。それを店の中に入れて欲しいんだけど」

きよるきよると店内を見回さなくても、ひとりの客は僕だけ。

「いいですよ、でもドリンク代割り引いてくださいね」

看板の横に花なんてあったっけ、と立ち上がった店の外に出た。

花は、確かにあった。

植物じゃなかったけど。

マフラーをぐるぐる巻いて、ニットの帽子を目蓋ギリギリまで下げて、とてもせつなそうな顔して。

「どうしても、渡さなくちゃと思って」

赤い包装紙に金色のリボン。

「私が意地になりすぎてたの。ごめんなさい。それとも、もうダメ？」

「ダメだったら、ここになんて来てない。僕が先に謝れば良かった。ごめん」

侘びの言葉は一度口に出してしまえば、とても簡単に僕たちを溶かした。

「こらっ！頼まれたことはすぐ遂行しなさい！コートもなしにそんなところにいたら、凍っちゃうわよ」

睦美さんがドアから顔を覗かせる。

彼女と一緒に店に戻ると睦美さんは満足そうに微笑んだ。

「そうそう、バレンタインに恋人同士が別々にいるのなんて、良く

ないわ。ね？
「
外は雪、ずいぶんとロマンティックだ。

制服

みんなで最後の寄り道をしようと、ドアを開けた。

「睦美ちゃん、今日卒業式だったんだよー」

なんて、みんなで卒業証書の筒を見せる。

式では感極まって泣いちゃったりしたんだけど、実はあんまり変わる気がしないんだ。

地元を離れる人は、ほんの少し。

昼間に過ごす場所は別々でも、同じ場所に住んで、電話でもメールでも繋がれる。

実際、明日はカラオケに行く約束もできてるし。

いつもと同じ場所に陣取って、今日はちょっとお祝いだから、お菓子も頼んじやおっかなんて陽気さ。

髪の色もお化粧も、これからへの話題は尽きない。

工学部に進学する友達に、男の子紹介してーとか頼んだりして。

ねえねえ、どんなサークルに入る？合コンなんかもあるよねって。

「賑やかなしいね、もうお別れだと思つと寂しい」

睦美ちゃんがオーダーを運びながら、しみじみと言う。

「やだあ、来るよ。睦美ちゃんに会いに」

通う場所が変わるだけで、私たちのノリはそんなに変わるものじゃない。

お母さんたちだって、学生時代の友達と会うときは、高校生みたいな声上げてるもの。

睦美ちゃんは薄く笑う。

「次に会うときは、あなたたちは制服を着てないのよ」

桜の花びらがはらり、と落ちたような笑い方だ。

「高校生のあなたたちと会うのは、今日でおしまい。次に会うときは、みんな別々の道を歩いているの。それが寂しい」

ああ、そうか。高校生の私たちは、今日でおしまいなのか。

スカートの丈を短くしても、髪を染めても、もう誰も何も言わない石のついたピアスは日常のものになる。

それはとても望んでいたものだったのだけれど。

自分のブレザーとチェックのスカートを見下ろして、向かい側の友達と同じことを再確認する。

もう二度と同じ服を着ることはないんだ。

制服は何かを押し付けられている気がして、ちっとも好きじゃなかった。

それなのに、ここに来る私たちはいつも制服姿で、それは学校帰りだから当たり前のことだったんだけど。

何度も繰り返されたこのテーブルの場面は、もう二度と来ない。

そうだね。高校生の私たちは、もうおしまい。

「あらら。泣かせるつもりじゃなかったのよ、ごめんね」

睦美ちゃんが慌てた顔で言う。

「うっん、大丈夫。また、ここで集まるから」

悲しいんじゃないかって、なんだか甘い感じ。

この感情を「せつない」って言うのかな。

「もう一回、校舎見てこようか」

誰かが言い出して、みんなで立ち上がった。

「集合写真、撮っておく？」

睦美ちゃんにカメラを渡して、「ハーモニー」の前に並ぶ。

「これでいい？」

差し出された液晶には、全員同じ制服を着た私たちが映っていた。

f
i
n
.

桜夜風

夕食を終えて片付け物が済んだ後、誠司君に散歩に誘われた。最近暖かくなってきたので昼間のお客様が増えてきて、公園の桜はまだ見上げていない。

本当は、青い空に咲く桜と一緒に見たかった。

誠司君が休みの日、私にはお店がある。

お店が休みの日は、誠司君は仕事。

店の窓越し、ひとりで見た桜は幸福の色。

薄い靄のようなその色に、小さく願掛けしてみた。

新しいメニューの評判が、悪くありませんように。

実用的な願いに、桜も呆れてるかも。

夜の公園は静かで、ひとりでは少し怖い。

外灯に白く光った桜は美しく病的で、梶井基次郎の短編なんか思いつく。

「本当に屍体が埋まったら、困るね」

誠司君は意味がわからないらしく、曖昧に頷いた。

そうだね、梶井基次郎を読む誠司君なんて、想像できない。

私が教室で本を読んでいた時間、誠司君は体育館でバスケットボールかなんかしてたでしょう。

近くに住んでいたのに、知らなかった人。

三歳違いの私たちが、どこかで会うなんてこともなかったでしょうけど。

私がコンビニでアルバイトしてなければ。

誠司君が夜のアルバイトをしていなければ。

もっと前、私があの時結婚なんてしていれば。

誠司君がちゃんと学校に通ってれば。

何かひとつでも違っていれば、私と誠司君が出会うことはなかった。

薄ぼんやりと暗い公園の中を、桜の樹を仰いで歩く。

誠司君が大きく伸びをする。

「満開だな。こんなに近い場所に満開の桜、贅沢だね」

さあっと吹く風に、花びらが舞い始めた。

誠司君の髪にも、桜色がひとひら留まる。

四月初めの風は冷たくて、ポケットに手を入れたまま黙って並んで桜を眺めた。

「桜、綺麗だね」

「今日は月も綺麗だ」

ただこれだけのやりとりをするまでに、どれくらいの分岐点があったんだろう？

たとえば、誠司君が一子さんのお店を担当していなければ。

「肩が冷えてきちゃったね。家に入ろうか」

「お茶入れてくれる？葉っぱは嬉野で、急須も暖めてね」

「それは、プロがやるべきでしょう」

「たまには、他の人が淹れたお茶を飲みたいの」

はらりと舞った桜の花びらを、誠司君が空中でキャッチする。

「よし、じゃあ俺が淹れたお茶の香りが薄いとかが、冷めるとか言わないように」

「言う。言わなくちゃ、美味しいお茶にありつけない」

キッチンでお湯を沸かし始めた誠司君を、ソファに座って待った。

「お茶のご用意をいたしましたよ、お嬢さま」

誠司君が小さなトレーで、揃いの白い湯飲みを運んでくる。

綺麗な水の色のお茶には、ひとひらの桜色。

春の何日かの、特別なお茶。

一口でお茶を飲んじゃう誠司君が、こんなことをするなんてね。

「睦美ちゃんに会わなければ、日本茶は全部日本茶だったな」

誠司君が隣に座りながら言う。

私たちが並んで座っているのは、本当にひとつずつの小さな分岐の果てだ。

「来年は、お花見会しようか。公園にカフェの出前」

「いいね。そうすれば、俺たちも花見ができる」

鬼が笑うような話をしながら、桜の花を散らす風の音を聞く。

f i n .

ささのは、さささ。

七夕は、旧暦が正解だ。
でない、今年もほら、織姫と彦星は会えないじゃないの。

ハーモニの軒先には小さな七夕飾りがあって、ささやかな願いの短冊が飾られている。

カウンターのの上に置かれた色紙の短冊を、手に取ってみて、また戻した。

「あら、どうぞお書きくださいな。お遊びですけど。」
『会いたい』と書いて、やっぱり握り潰した。

彼が転勤してしまってから、私の週末はぼかんと暇だ。

毎週会いに行くには、新幹線代はお財布に痛すぎる。

それに、会つと別れる時間が怖くて、最後に泣かないのが精いっぱい。

彼が会いに来てくれても、新幹線のホームまで見送りに行けない。だって、泣いちゃうもの。泣いて困らせちゃうもの。

改札で手を振るたびに、彼は寂しそうな顔をして、小さく「ごめん」と言う。

だけど、まだ言うてはくれない。

一言おいでと言ってくれれば、彼の転勤先について行くつもりだった。

引越しギリギリになっても、彼は言ってくれなかった。

「今はまだ、二人分の生活を支えられないから」

そう言う彼に、連れて行ってくれとは言えなかった。

何度か訪れた彼の部屋には、いつも必要最低限の物しかなくて、知り合いもいない場所の心細さを思う。

暗い部屋に灯りをつけて、テレビ相手の一人の食卓だと言っていた。その時、彼はどんな顔をしているんだろう。

「彼がね、転勤しちゃって、遠距離恋愛になっちゃって」
カウンターの中の睦美さんに聞いてもらいたくなっただのは、彼女がいつも幸せそうだからだ。

「睦美さんはいいな、週末にはお店の手伝いまでしてくれる旦那様がいて」

同年代らしい彼女は、私にふんわり微笑んで見せた。

「まだ、入籍してないの。誠司君は就職したばかりだし、私はお店の改装の借金が残ってるし」

前のオーナーの一子さんと雰囲気似てるから、てっきり身内かと思っていたら、違うらしい。

「転勤からは、戻ってくるの？」

「わからない。だけど、来いとも言ってくれない」

お店の中では、小さい子を連れたママさんが二人、お喋りに夢中になっている。

「ああ、来いとは言えないでしょうね。俺のために知らない生活に飛び込んでくれなんて、言えないよね」

彼がそう考えているのかも知れないと思ってはいたけれど、他人の口から聞くと、それが真実であるかのように聞こえる。

「行ってもいいと思う？」

勢い込んで聞いたのは、誰かに背中を押しして欲しかったから。

「私は彼じゃないから、知らないわ」

睦美さんが笑う。

「でも、私の経験なら話せる。私ね、誠司君を私の博奕につきあわせたくなくて、ずっとジタバタしてたの。それでも誠司君と一緒に居たいって言うてくれて、このお店まで見つけてくれた」

それから照れくさそうな可愛らしい顔になって、一言つけ加えた。
「だから今、とつても幸せ。惚気てごめんね」
休みの日に見る睦美さんの旦那様は、お店を手伝いながら、とても楽しそうにしている。

私も、彼の横にいれば幸せ。

生活を支えられないなんて、私も一緒に生活を支えれば良いだけの話だったのに。

来いって言われなくなつて、行こう。

短冊を見て溜息つくよりも、自分が動こう。

ささのは、さらさら。

お星さま、私の願い事を聞いてくださいな。

どうか彼が、今日下した私の決断を、喜んで迎えてくれますように。

私、そつちで仕事を見つけて、良いかな。

メールを発信すると、通話で返事が戻った。

「来てくれるの？知り合いもないし、楽はさせてやれないし」

「知り合いなら、誰よりもあなたがいるじゃない。会いたいと思いつけるより、傍で新しい仕事を覚える方が楽なの。そう思つちゃ、いけない？」

そう思つてくれると思わなかつた、ありがとう。

彼の声は潤んでいた。

「来い」と言わないのは、「来るな」って意味じゃなかつたね。

携帯を片手に、カーテンを開けて空を見上げる。

かるうじていくつかの星が見える。

織姫と彦星は雲の上で、年に一度の逢瀬中。

ささのは、さらさら。

私はこれから、彼と一緒に眠る夢を見る。

f
i
n
.

融解

姉の家に行く、と言ったら、母から渡されたものがある。

ばかでない、コスモスの花束だ。

「睦美はコスモスが好きだから。よろしく言っただけ」

母はまだ、姉の店に行ったことはない。

娘が水商売をするなんて、危なっかしくて見ていられないと言う。

水商売っていったって、酒を扱っているわけじゃないし、姉は頑固な上に手堅いから、博打みたいな真似はしないとと思う。

大体店を開く前だって散々反対して、僕としては姉の方が心配だったくらいだ。

結局結婚して家を出た形になっているけど、姉の性格で、旦那の稼ぎをアテにした奥様趣味な商売なんて、してるわけがない。

僕自身も店に行くのは初めてだけれど、多分誠司さんは上手く使われていると思う。

一見優しくて頼りなげな姉が、中身はシビアな商売人だと知っているのは、一緒に育ってきたからだ。

母から見れば、料理上手で物腰の穏やかな姉は、胸を張って嫁に出せる人だったんだろう。

譲らない私の強さは、母や父から見れば、世間知らずの戯言にしか聞こえなかったらしい。

あの価値観は、社員が終身安定だと思っている世代の人たちだから、仕方がない。

かく言う僕も会社員だし、人生に勝負をかけることも無いと思う。

少し恥ずかしい思いをしながら、花束を抱えて電車に乗った。

誠司さんが駅の改札で待っていてくれたので、ほっとする。

「わかりにくい場所なんですよ」

手に大きな袋をぶら下げていた。

「あ、食パンです。昨日から、トーストサラダ始めたんで」

「誠司さんもお店、手伝ってるんですか」

「土日はね、仕事ないから。俺だけ家に居てもねえ」

思った通り、使われているらしい。

住宅併設の店は、僕が考えているよりも今風に仕上がっていた。

母からだと言束を差し出すと、姉は嬉しそうに両手で受け取った。

「こんなにあくさん、花瓶が足りないわ。誠司君、どうしよう？」

「一子さんの置いてった傘立て、持ってくる」

店の中に客が居るのに、生活感丸出しの会話をしている。

誠司さんが大きい壺を外のシンクで洗って、店の中に運んできて、コスモスをその中に入れた。

「いきなり、秋の風が吹いたみたいね」

姉はほっこりと笑った。

「お母さん、私がコスモスを好きだからって言ったでしょう？」

「うん、昨日花屋に注文してみたわ」

「お母さんは、コスモスとかカスミソウとかが好きな娘を望んでたのよね」

カウンターの向かい側で、姉は家にいた時みたいに、茶葉を真剣に計った。

「そりゃ儂い花も好きだけど、私が一番好きなのは、子供の頃からツバキなのよ。だけど何回訂正しても、お母さんはそれを自分の望みとすり替えちゃう。それに沿おうとしなかった私は、親不孝だわね」

誠司さんは、黙って棚にカップを収めていた。

「いいんじゃない？姉ちゃんも頑張って自分のやりたいこと、自分の責任ではじめたんだから」

「でも、お母さんはまだ、開店してから一度も見に来てくれない」
姉がそんなことを気にしているとは、思わなかった。
たまに実家に来るときには、母の好きな菓子を携えて、にこにこことお喋りに興じていたから。
そうか。姉はまだ、両親が望んだことから外れたことに、罪悪感を抱いていたのか。

姉から預かった手土産を持って帰宅した。
母は居間で、アイロンをかけていた。

「睦美、元気だった？」

「姉ちゃんは常にパワフルで元気だよ。たまには、顔見に行つてやれば？」

母は少し困った顔になって、人目を憚るような小声で言った。

「睦美がやつれるような反対の仕方しちゃったもの、今更」

「姉ちゃん、未だに反対されてると思ってるよ。一回顔出してやつてよ」

そう言っているうちに父がゴルフの打ちっぱなしから帰宅して、母は姉とよく似た顔で、キッチンの茶葉を計り始めた。

「ねえ、来週は睦美のお店に行つてみようかしら」

「そうだな。誠司さんに我儘言つて、手をかけているんじゃないか」
開店から何ヶ月経つたらう。

父と母が「ハーモニー」の扉を開けたら、姉はどんな顔するんだらう。

「ねえ、予告しないで行ったほうが、姉ちゃん喜ぶと思うよ。地図なら書くから」

その時の姉の顔を想像して、僕はちよつとだけ、姉と一緒に嬉しくなった。

キンモクセイの記憶

ちりりん可愛らしいドアベルの音と共に、黄金色の秋の香りが店内に流れ込む。

その香りは、もう会わない人を思い起こさせた。

あの人は、幸せでいるだろうか。

ただただひっそりと、微笑んでいるような人だった。

僕はとても若くて我儘で、傲慢だった。

いくつか年下だった筈の彼女は、今から思えば僕よりもとても大人で、優しかった。

だから、僕は彼女を見縊っていた。

何人かの女との情事は、隠しているつもりだった。

仕事のトラブルで荒れたときには、お前みたいに気楽な仕事はしていないんだと、あたった。

風邪をひいたと聞けば、日頃の摂生が良くないのだと嘲った。

彼女が悲しい顔のときは辛気臭い女だと言ったくせに、自分が辛い時には平気で部屋に呼びつけた。

僕は、本当に勝手だった。

疲れた彼女が他の男に癒しを求めたことを、どうして責めることができたんだろう。

二度と顔を見せるなと言った時、彼女が言ったアリガトウの意味は、開放された喜びだったのかも知れない。

確かめることもできない過去。

愚かで情けない、消してしまいたい僕自身の記憶だ。

もう一度、ドアベルが鳴る。

「ごめんなさい、ちょっと遅れました」

向かい側の席に座る人は、軽く息を切らしている。

「そんなに待ってないよ。それよりも、自転車でそんなにスピードを出しちゃいけない。事故に遭ってしまおうよ」

ああ、彼女と待ち合わせた時は、僕は必ず三十分以上遅れていたんだ。

それが自分の権利でもあるかのように。

「外は、キンモクセイの香りですばいです」

向かい側の席の人が微笑む。

「うん。君がお茶を飲み終えたら、公園を一周して、それを楽しむことにしようか」

僕も視線を返して、これから過ごす時間についての提案をする。

これから感情のやりとりをはじめらるう人の、今これからの気持ちを、僕は考える。

彼女の気持ちを少しでも汲むことができれば、彼女を失うことなどなかったらだろうから。

睦美さんに挨拶をして、店を出た。

街は今、秋の香りだ。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2944p/>

カフェ「ハーモニー」・・・前髪を掴め！番外

2011年10月6日13時20分発行